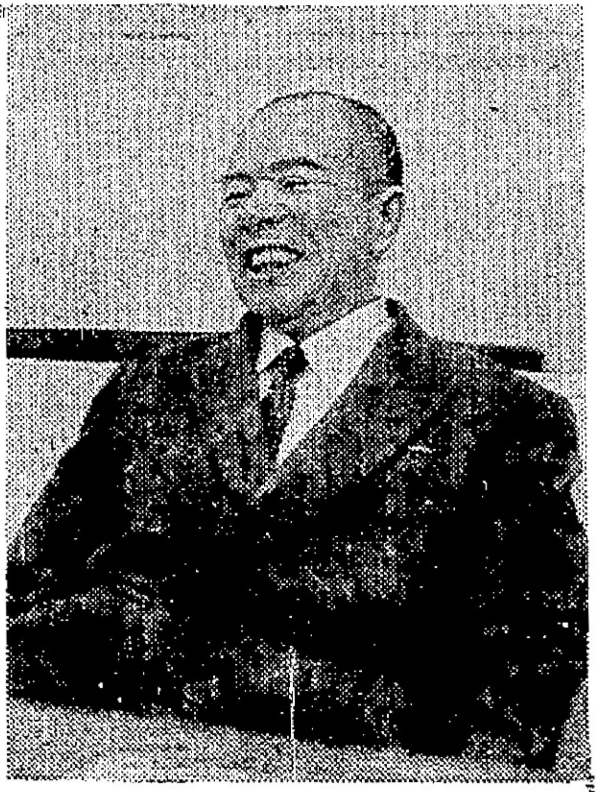

自己を捧げる人を

若いころから社会事業に尽す

日本福祉大学 鈴木修学学長(六〇)

○…やせて、小柄で「はい。ほうぼう」と好々爺然とした鈴木さんを社会事業関係で知らない人はあるまい。丹羽郡布袋町の家畜商の家に生まれ、菓子製造もやったが、ライ患者、孤児の救済、そして教育界にも乗り出し、昭和二十二年正式に僧籍にはいり今は日蓮宗権大僧正である。

○…「あのころは一六銀行のごやっかいになりまして」と思い出を話す。「三十七歳の時から社会事業に身を投じ、東京から福岡までいろいろのことをやりました。名古屋では駒方寮、八事少年寮、名古屋養育院などあります。苦労したこともありますね。松原寮養所でライ患者のお世話をした時は私財を全部質屋に入れてやっとしのいだものです。台湾に〝駒方村〟をつくろうと孤児二百六十人を連れて五百六十㌔の開墾をしたことがあります。終戦でダメになりましたが……。名古屋へ帰り、知多郡でいわゆる不良少年十七人と二・五㌶の農場をやりました。タネをまき耕作すれば立派な米がとれます。人間も心の耕作をすれば立派な社会人になると悟りましたよ」――これが鈴木さんの信条である。暖かい心で人に接し導けばどんな人間でも更生する。かつての不良少年も一人前になった。

○…「社会事業の科学化、専門化が必要な時代になりました」――大学をつくった動機である。社会福祉学部で社会福祉司や生活改善普及員などを育てている。「人類のために自己を捧げる人を」――熱烈な願いである。

法音寺住職の鈴木さんが手がけたお寺は全国に三十五もあって、大学をもり立ててくれる。「信者は三十万人くらいでしょうか」といい、これらのお寺に青年団があり近く大会を開くという。

「今の青年はしっかりしています。立派な社会人になるでしょう。学校も先生、学生お互いがほめ合い、忠告し合って楽しいものにして行きたい」――人を信じ、やさしく見守る学長さんだ。〔写真は学長室で語る鈴木学長〕